

川柳がくれた第二の青春

令和8年(2026)5月1日

2020年5月、私は初めて「毎日新聞・甲信版の投稿川柳」に作品を送った。思えば、あの一步が私の暮らしを大きく変えた。木曜日の朝3時に新聞を開き、自分の句が載っているかどうかを確かめる。その緊張と期待は、年齢を重ねた私にとって、日々の張り合いとなった。

しかし、その甲信投稿川柳が今年3月で終了となった。6年間で250首余りが選ばれ、掲載された句はすべて私の大切な記念である。終わってしまうと聞いた時は、胸にぽっかり穴があいたような気持ちになった。これで私の川柳生活も終わりなのだろうか、そんな思いがよぎったのも事実である。

けれど、新聞の文芸欄には「脳トレ川柳」という新たな投稿欄がある。全国から応募が集まり、選者の目に留まるかどうかは分からない。それでも、川柳を続けたいという気持ちが勝った。私はすぐに気持ちを切り替え、毎週3首を作って投稿する事にした。投稿を始めて7回目の日曜日、思いがけない出来事が起こった。なんと、2回目に投稿した句が掲載されていた。

もし載らなければ、脳トレ川柳への投稿はやめようか。そんな弱気が頭をよぎっていた矢先の掲載であった。新聞を開いた瞬間、胸の奥からじんわりと温かいものが広がり、思わず声が出た。まだ、続けていいんだ。そう背中を押されたような気持ちであった。掲載された20人の中で、88歳の私は上から二番目の高齢者であった。年齢を重ねても、挑戦する気持ちを持ち続けている人が全国にいる。その事実が、私にとっては何よりの励みである。

これまでに掲載された250首余りの川柳は、私のHP「23y27.com」にまとめてある。ページを開けば、当時の情景や心境が鮮やかによみがえる。この句は、あのときの出来事から生まれたな、この一句は、苦しい時期を乗り越えた証だった。川柳は私の人生の記録でもある。また、掲載句をまとめて2冊の冊子にする事も出来た。手に取ると紙の重みとともに、6年間の歩みが確かに刻まれているのを感じる。

初めて選考された日の喜びは、今でも鮮明に覚えている。日誌には、その時の心境を丁寧に書き残してきた。掲載されるかどうかのスリル。選ばれた時の歓喜。次も頑張ろうという気力。これらは、年齢に関係なく湧き上がる、純粋な創作の喜びである。

私は後期高齢者であり、心臓の病も抱えている。それでも、寝込む事なく日々を過ごしているのは、生活のリズムと、創作の楽しみがあるからだと思っている。

健康のために規則正しい生活を心がけ、無理をしない範囲で日々の活動を続けている。川柳づくりは頭の体操にもなり、心の張りにもなる。まさに、私にとっての「脳トレ」である。さらに、週に一度は「日々気になる出来事」を日誌にまとめている。また、HP「ふるさとの花と風景」の更新も続けている。こうした小さな目標が、私の毎日を豊かにしてくれている。

川柳を始めたのは、決して若い頃ではない。けれど、年齢を理由に何かを諦める必要はないと、今の私は胸を張って言える。川柳は、私に「今日を生きる楽しみ」をくれた。新聞に掲載されるかどうかのドキドキは、まるで第二の青春のようである。そして、掲載された時の喜びは、何歳になっても色あせない。これからも、元気でいる限り、川柳を作り続け、投稿を続けていきたいと思っている。人生の晩年に、こんなにも夢中になれるものに出会えた事に、心から感謝をしている。